

## 慰霊塔「招魂碑」と「満州開拓団殉難の碑」

### 宮城県色麻町・王城寺原開拓地

宮城県中部の王城寺原開拓地は、旧陸軍の演習場跡地に立地する。加美郡<sup>しかま</sup>色麻町と黒川郡<sup>おおひら</sup>大衡村にまたがっている。

45年8月の終戦で米軍に接收された約4000<sup>㍉</sup>の旧陸軍施設は、同年10月、宮城県に譲渡された。農林省（当時）の緊急開拓地区の指定を受け、開拓事業が開始された。旧満州（現中国東北部）からの引揚者、復員者、戦災者、地元増反者ら400戸余りが入植した。入植者はまず、移住している旧兵舎の周りの空き地を開墾して、自家用野菜を作り始めた。

米軍は4年、演習場として使用するために再接収し、開拓地南側の移住者に立ち退きを命令。202戸の開拓者が立ち退きの止むなきに至った。

その後、一部の地区（420<sup>㍉</sup>）が返還され、53年には850<sup>㍉</sup>の解除が決定した。開拓者一丸となつての強い要求、熱意が実を結んだ。演習場は8年、米軍の完全撤退により、陸上自衛隊の「王城寺原演習場」となった。

開拓地は火山灰土の強酸性土壌だった。不利な条件を乗り越え、冷害など幾多の試練に耐え、開拓に精進した。営農形態は畑作から酪農、水田作へと変化していった。

色麻町役場前に二つの石碑が並んでいる（写真㊤）。右側の塔は、色麻村（当時）出身の戦没者を慰霊するため、67年に建立されたもので、碑銘は「招魂碑」。碑文には、「嗚呼 諸士の烈々な献身殉国の大節は永く青史を照らし後世を安んぜん 題して招魂碑 此の文字に刻まれた吾が郷土の英魂三百余柱の遺芳永く後世に伝えんとす」と記されている。

左側及び写真㊦の碑は68年に建立されたもので、碑銘は「満州開拓団殉難の碑」。45年8月、旧ソ連の参戦や終戦の混乱で、色麻村の開拓団でも多数の人が犠牲になった。碑文には、「かつて渡満の同志が發起人となり、町民各位或いは有志の方々の御芳志を仰ぎ、肉親の方々に思いを馳せながら、親の、子の心情に思いを馳せながら、殉難者の御冥福を祈るとともに、世界平和のために二度と繰り返すことのないようにとの願いを込め、ここに鎮魂慰霊の碑を建立す」と刻まれている。

## 王城寺原開拓地 慰霊塔「招魂碑」と「満州開拓団殉難の碑」

①調査日 2017年7月24日

②所在地 加美郡色麻町

③地区の沿革 王城寺原の開拓は、明治30年頃三井財閥によって行われたが明治41年旧日本軍に買収され、以来終戦に至る40年の間、旧日本陸軍の屈指の演習場として利用されてきた。

終戦後、米軍第187空挺隊より宮城県に譲渡になり、農林省の緊急開拓地区の指定を受けて、開拓事業が実施された。引揚者、復員者、戦災者、地元増反者等625戸が入植したが、昭和22年宮城軍政府覚書により接收されて、202戸の強制立退きを命ぜられた。このとき、工作制限を受けて残留した者に更に昭和25年全面接收の命令が出され、前後7年に亘り接收に反対して開拓地解放の運動を展開した。辛うじて一部の接收解除をうけて、200余戸の順入植者と200戸あまりの増反者とが自作する土地を確保することができた。

窮乏に耐え、冷害、災害等困難を乗り越えて、開拓28年を経過し広漠たる原野は今や、美田と化し、乳牛の群れるのを見るに至った。

④設置年月日 平成6年11月

⑤設置者 殉難碑建設委員会

⑥碑名 殉難碑

⑦碑文(表面) 満州開拓団殉難の碑 色麻町長 鈴木省治 書

第二次世界大戦争から五十年過ぎた。今日も船形の山の端をかすめ白い雲が  
行き、清らに流るる花川、保野川の漣に銀の光をこぎし月に行く。

故郷色麻の自然は今も昔のままを彩る。村人は不屈の闘志と勤勉によって戦  
後の疲弊窮乏を脱し、行き交う町民の眼に光をあて、活気溢れ、豊かさを謳歌  
する町とはなった。

然し、第二次世界大戦に南溟の狐島に、渡満の地に、大陸の地に、はた又  
寒風吹きすさぶ北海の果てに護国の鬼と化した英霊諸氏もさること心から、  
子々孫々に語り継ぐことが、今一つ有るを忘れてはならない。

今を遡ること六十有余年当時の日本は、五族共和、王道楽土建設の御旗を  
掲げ、昭和七年、満州事変終わるや、満州国を建国、武装移民、満州開拓義  
勇軍などの日本人による開拓を始めた。その時代の日本の農村は、凶作、恐  
慌等により窮乏に喘ぐ時でもあった。昭和十一年には国の計画が策定され、  
以降二十一年で一〇〇万戸、五〇〇万人開拓者を送るというものであった。こ  
のため、国策移入として全国から三十万乃至、四十万人の人々が満州に渡っ  
た。当時の色麻村も国策に沿い、分村計画を樹立、数多くの人々を満州に送  
り、色麻郷を営むまでに至った。幾多の困難を克服、生産も軌道に乗り、第  
二の故郷として反映を信じたところ、戦局日々悪化するや、若人は根刮き、  
軍に招集せられ開拓団は婦女子、老人のみとなった。

昭和二十年八月九日、ソ連参戦。ソ連雪崩の如く国境を越えて乱入。夢と  
希望に満ちた新天地は悪夢の生き地獄と化した。殺戮、略奪、暴行、陵辱、

酸鼻を極め、或いは何百キロの逃避行の中で寒さと飢えと病に倒れし者も限りなしと聞く、また、敵に知られるを恐れ、頑是なき幼な児の口を覆う母親。その心情哀れなり。その心情を察するに余り在り。ただただ涙、滂沱として筆舌に盡し難し。赤き夕陽の満州の大地に骨を拾う者もなく、五十年の歳月は流れ去った。

さりながら、国策、分村計画に沿い、満州に渡り切創に会いし人々はまさに戦争の殉難者である。此の人々を忘却の彼方に流し去るにしのびず。

戦後五十年に期し、かつて渡満の同志が発起人となり町民各位或いは有志の方々の御芳志を仰ぎ、肉親の方々に思いを馳せながら、親の、子の心情に思いを馳せながら、殉難者の御冥福を祈るとともに、世界平和のために二度と繰り返すことのないようにとの願いを込め、ここに鎮魂慰霊の碑を建立す。

平成六年八月十五日 色麻町長 鈴木省治 撰文

殉難碑 建設委員会 委員長 鈴木賢蔵 委員 早坂彦二

委員 小関英司 会計 高橋甚作

施工 色麻町農業協同組合 株式会社斉藤石材

平成六年十一月 建立

⑧碑文（裏面） 無し

⑨現在の状況 役場前で管理されている。

